

兼好さん、あなたのご意見は？

国保連合会囑託 ひがしだ ふみお
東田 文男

久しぶりに京都御苑内を散歩した時のことです。ベンチに腰かけたところ、向かい側のベンチにいた80歳ぐらいの男のお年寄りのつぶやきが耳に入りました。「猫に生まれた以上、猫として死ななあかんよ…」。

よく見ると胸に猫を抱きながら語りかけているのです。猫は野良のようでした▼散歩をするといろんな人に出会います。顔見知りになると挨拶を交わすこともありますが、不思議なもので「挨拶をしても答えない人」というのはお互い本能的に分かるようです▼よく目にするのが運動靴を履き両手を大きく振って、脇目も振らず速足で歩くお年寄りの姿です。健康のためでしょう。でも何やら修行僧のように感じる時もあります。一方、手をつなぎ京観光を楽しむ同年代の夫婦を見かけると、恥ずかしくもあり、うらやましく

も…▼ところで男性の平均寿命も80歳を超えました。評論家で82歳の樋口恵子さんは「人生100年の計」を立てるよう勧めています。中国の始皇帝は「不老不死」を追い求めましたが、私たちは今それを手中にしつつあるともいえます▼この「長い老後」をいかに過ごすか。認知症の人の行方不明が大きな反響を呼びました。他人事ではありません。「ピンピンコロリ」とはなかなかまいりません▼命長ければ辱(はじ)多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ…。徒然草の一節です。法師は「この世に死があるからこそすばらしいのだ」と説きます。では、今のこの長寿社会、兼好さんの目にはどのように映っているのでしょうか。聞いてみたい気がします。



老若男女国籍も違う人たちが、思い思いに時を過ごす京都御苑